

スポーツ博物館の史的研究に関する予備的考察

綿貫 慶徳

A Preliminary Consideration on Historical Studies of Sports Museums

WATANUKI Yoshinori

1. はじめに

日本の博物館は、一部の伝統的な国立博物館や最新鋭のデジタル機器を備えた話題性に富む博物館を除き、軒並み経営苦境に立たされている。半世紀以上にわたり、日本を代表する総合的なスポーツ博物館として、スポーツ史の専門家のみならず、幅広い層の人びとに親しまれてきた秩父宮記念スポーツ博物館の存廃問題は、経済効率を優先する文化行政の一面を露呈させるところとなった。この存廃問題が浮上した2015年を端緒として、学術団体主催のフォーラムや学会発表等が重ねて実施されたことにより、研究対象の周縁に位置付けられてきたスポーツ博物館は、歴史資料の収蔵庫としてばかりでなく、学術的に探求されるべき「知」としての関心を集めつつある。しかしながら、スポーツ博物館が確たる文化資源として社会的理解を得られるかどうかは、関連研究の蓄積如何が一つの鍵となるであろう。本稿では、スポーツ博物館に関するさらなる議論の活性化と学知の生成を目的として、スポーツ博物館略史とスポーツ博物館に関する史的研究の動向をとりまとめ、日本のスポーツ博物館における今後の検討課題を示していきたい。

2. 用語の使用について

本稿で渉猟した英語文献では、「博物館」のみならず「資料館」、「記念館」に着目したものが認

められる。これらの総称として、英語文献では「museum」の用語が使用されているため、「スポーツミュージアム」の表記が適当であると考えられるが、日本語文献による研究の連続性という点を鑑み、日本語文献で使用されてきた総称である「スポーツ博物館」を本論で使用していく¹⁾。また、「スポーツ博物館」の外延をどの範囲とするかについては、館名にスポーツ博物館と銘打っているもののみならず、国立レベルの総合博物館から市区町村レベルの博物館、教育機関の博物館、私設博物館等に至るまで、展示にスポーツの要素を加えたものが多種多様に存在すること、また、「スポーツ」や「スポーツ文化」の概念が時代や社会によって変化することをもって、困難な作業であると言わねばならない²⁾。このため本論では、本稿で使用した文献に記載されている博物館を「スポーツ博物館」に相当するものとして便宜的に措定していきたい。

3. スポーツ博物館略史

日本と海外のスポーツ博物館の設立状況を通史的に整理した取り組みは、いたって低調であったと言わねばならない。世界的な視点からスポーツ博物館の足跡を編年史的にたどった記述箇所があるV.J.ダニロフの著書は、唯一の参考文献に等しいものとして位置づけられるが、大方の記述はアメリカに関する事柄であり、日本に関わる記述量は僅少である³⁾。従って以下では、スポーツ博

博物館を検討対象とした論考にある断片的な記述内容を手掛かりとし、日本とともにスポーツ博物館の伝統や館数の多さから記述量の蓄積が認められるアメリカとイギリスの事例に注目し、スポーツ博物館略史をまとめていきたい。

アメリカやイギリスでは、19世紀末葉より博物館でスポーツ用具やトロフィーを展示する取り組みが散発的に実施されていた。ヨーロッパ全土に目を転じてみると、1920年代にスキーやアニマルスポーツに特化した博物館が北欧諸国やドイツ、スペインで開館し⁴⁾、またアメリカでは、同国に現存する最古のスポーツ博物館であるアメリカ野球殿堂博物館(National Baseball Hall of Fame and Museum)が1939年に誕生している。このような個別的事象は、20世紀前半までに散見されるが、スポーツ博物館が日本、アメリカ、イギリスの各国内で広がりを見せていく始点は、1950年代まで待たねばならなかった。

中房ほかがまとめた「全国スポーツ博物館一覧」⁵⁾に注目してみると、日本では1950年代以前に誕生したスポーツ博物館がごく僅かに存在するが、相撲博物館(1954年)、秩父宮記念スポーツ博物館(1959年)、野球体育博物館(1959年、現在の野球殿堂博物館)といった、今日において全国的な知名度を誇るスポーツ博物館は、いずれも1950年代に開館している⁶⁾。戦前より大衆的人気を博し、戦後復興の象徴となった競技やイベントにまつわる歴史資料を収蔵したこれらのスポーツ博物館は、後に多様なスポーツをモチーフとした博物館が数的拡大を遂げていく端緒となった。1960年代以降、明治100年、自治体100年を記念し、自治体史の編纂に向けて収集した資料を公開するために地域博物館が建設されていくと、地域固有の伝承遊戯や伝統芸能を取り扱うスポーツ博物館が誕生していった。博物館の開館数が急増した1980年代には⁷⁾、地方分権の推進が図られる中で、自治体を設置者とする博物館の増加が顕著にみられるとともに、バブル景気を背景にして自社製品の保存や展示を目的とした企業を設置者とする博物館の開館が相次ぎ、三菱オートギャラリー

(1989年)、トヨタ博物館(1989年)等、とりわけ、国内自動車メーカーが博物館事業へ積極的に進出し、また、軟式野球資料室(1981年)、ブリキのおもちゃ博物館(1986年)、大町温泉博物館(1987年)等、多様な世代の関心を引く博物館が誕生した。1990年代に入ると、横綱北の湖記念館(1991年)、落合博満野球記念館(1993年)、植村直己冒険館(1994年)に代表されるような、個人の偉業を称えるスポーツ博物館の開館がみられるようになった。

J.ホワードによると、アメリカでは1950年までに4つのスポーツ博物館が存在するのみであったが、1950年代から60年代にかけて、プロスポーツリーグの発足、テレビによるスポーツ中継の普及、スポーツの経済的価値の高まりを要因として、シンシナティ・レッズ殿堂博物館(Cincinnati Reds Hall of Fame and Museum、1958年)、ネイスミス・メモリアル・バスケットボール殿堂(Naismith Memorial Basketball Hall of Fame、1959年)、プロ・フットボール殿堂(Pro Football Hall of Fame、1963年)等、数十ものスポーツ博物館が開館したという⁸⁾。その後、博物館の開館数が劇的に増加していく中で、1970年代の経済不況に伴う財政問題から閉館を余儀なくされた博物館もあるが、ベーブ・ルース生誕地博物館(Babe Ruth Birthplace and Museum、1974年)、ロジャー・マリス博物館(Roger Maris Museum、1984年)といった、野球で一時代を築いた国民的英雄を称えるスポーツ博物館が開館するとともに、個別の競技種目や競技団体に照準したスポーツ博物館が誕生していった。1980年代より、多くの博物館でスポーツに関わる企画展示が開催されていき、1990年代に入ると、ニグロ・リーグ野球博物館(Negro Leagues Baseball Museum、1990年)、女子バスケットボール殿堂(Woman's Basketball Hall of Fame、1999年)といった、社会的マイノリティの存在に目を向けたスポーツ博物館が開館した。

イギリスでは、1953年にクリケットの聖地とされるロンドンのローズ・クリケット・グラウンド

に設立されたメリルボーン・クリケット・クラブ博物館 (Marylebone Cricket Club Museum) が、一競技種目に特化した国内最初のスポーツ博物館とされている。1965年から1974年の10年間にわたり、国家経済が凋落傾向にあったにもかかわらず、博物館界への影響は総じて少なかったが、J. ライリーによると、1950年代中葉から1980年代初頭にかけて、スポーツ博物館をめぐる新たな動きは鈍く、せいぜい、中流階級や富裕層の支持を集め、彼らと密接な関係を結んでいたウィンブルドン・ローン・テニス博物館 (Wimbledon Lawn Tennis Museum、1977年) や世界ラグビー博物館 (World Rugby Museum、1983年) の設立が目立った事象であったという⁹⁾。これに加えてライリーは、1970年代の終わり頃から1980年代にかけて、下層階級の間で関心が高まっていたサッカーやボクシング等をテーマとする企画展示が博物館で実施されたこと、1980年代初頭より、マンチェスター・ユナイテッド (Manchester United) をはじめとする伝統的なスポーツクラブが競技施設に博物館を併設し、運営にあたっていったこと、1980年代から1990年代にかけては、全土をまたいだスポーツの巡回展示が増加していったことを指摘している¹⁰⁾。

以上、1990年代までのスポーツ博物館の変遷を概略した。これに若干の補足を加えるならば、各国で生じた新たな事象について時間差はあれども、1950年代を始点として自治体事業、スポーツの商業化、社会階級によるスポーツの嗜好性の違い等を背景にして、国内での広がりを見せていったスポーツ博物館は、1980年代に博物館の娯楽産業化が胎動し、幅広い観覧者層の獲得に資するスポーツが博物館界の中で注目されていくと、一ジャンルとしての地位を確立し、社会的に認知されていったとまとめることができる。

T. ルデルによると、1990年代以降、世界的にスポーツ博物館が増加しているという¹¹⁾。この数的拡大とともに、大規模なスポーツ博物館では、文字、写真、図表、映像、音響を用いた展示形態に加えて、スポーツ用具に直接触れるハンズオン

展示、アスリートとの交流やバーチャル機器を用いた競技体験に基づく実演展示、体験展示等を手掛け、視覚や聴覚に頼った従来型の展示形態は、多様な知覚の結集による体感を通じた展示形態へと進化を遂げている。さらに、競技会場に併設されたスポーツ博物館では、競技シーンの臨場感を提供するねらいで、館内での展示鑑賞 (体験) に会場見学ツアーを統合した取り組みが盛んに展開されており、数多くのスポーツ博物館が所在するロンドンでは、複数の競技会場を巡回するツアーが組まれている。

日常生活のデジタル化が進行していく2000年代から今日において、デジタルメディアを用いた取り組みに着手するスポーツ博物館が出現している。その内容は、館内へのデジタル展示物の配置、デジタル端末に内蔵されたアプリケーションを利用した展示物の周辺情報の提供といった展示の次元にとどまらず、デジタル化された所蔵品の検索システムの構築とオンライン・コレクションの提供といったアーカイブ作業にまで及ぶ。また、スポーツ博物館相互の関係強化に向けたネットワークの整備も進められており、2003年にイギリスでは、国内に点在するスポーツ関連資料の収集、国内の博物館に所蔵されているスポーツ関連資料の情報共有を司るスポーツ遺産ネットワーク (The Sports Heritage Network、現在のThe Sport in Museum Network) が形成され¹²⁾、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会の際には、同ネットワークがイギリス全土100ヶ所以上で、イギリススポーツ史にまつわる過去最大規模の巡回展示を実施した¹³⁾。デジタル革命の最中にある今日、以上のとおりスポーツ博物館の世界では、実物の「ハコ」や「モノ」を拡張した現象が認められる。今後の斯界の発展に向けた鍵は、デジタル化に対応できるほどの経営体力や運営能力を欠いたスポーツ博物館の存在を見過ごすことなく、いかに広域的なネットワークを構築していくかという点にある。

4. スポーツ博物館に関する史的研究の動向

スポーツ博物館を主題にした研究は、1970年代に始動した。前出のホワードによると、アメリカの名誉殿堂の設置動向を概観したG.レッドモンドによって1973年に上梓された論考を嚆矢とし、この現象がヒーローを崇拜する国民の欲望を反映したアメリカに特有のものとして、1986年にダニロフが更なる分析を試みたという¹⁴⁾。また、1991年に国際博物館会議（International Council of Museums）の機関誌「Museum International」の第43巻第2号において、スポーツに関わる特集が組まれたことは、当時の博物館学における専門的な関心事としてスポーツが浮上していた事実を示すものであった。

これらを端緒としてスポーツ博物館に関する研究は、英語圏の地域で盛んに取り組み、歴史学領域、及び社会学領域における批判主義的な検討を中心として、1990年代初頭より超領域的な知的関心を集めていった。この研究草創期より着手されている主な関心の在りかを整理してみると、歴史上の人物への感情移入やスポーツシーンへの懐古感情によって生じる「ノスタルジア」の概念枠組からスポーツ博物館の理解に迫ったもの¹⁵⁾、これと密接に結びついた取り組みとして、スポーツ博物館における歴史展示を個人の記憶、社会の集合的記憶が形成、強化、再生産される場として捉え、展示表象に投影された歴史観の解釈を試みたもの、文化を表象する装置としてスポーツ博物館を捉え、展示空間から浮き彫りにされる政治性やイデオロギー性を批判的に検証したもの¹⁶⁾にまとめることができる。また1990年代には、D.ゲルバートやダニロフによって、アメリカを中心とした海外に所在するスポーツ博物館のガイドブックがまとめられている¹⁷⁾。

このように1990年代は、スポーツ博物館に関わる研究が実質的に胎動した始点として位置づけられるが、歴史学領域においてこれを象徴する事象は、北米スポーツ史学会（North American

Society for Sport History）の機関誌「Journal of Sport History」第17巻第1号（1990年）より、博物館批評が掲載されたことであろう。この背景にはアメリカ社会において文化機関としての信頼度が高い博物館による歴史の語り、多種多様な人びとの歴史認識に少なからず影響を及ぼすとの考えに基づき、学術団体としてスポーツ博物館の存在に注目する必要に迫られていた事情があったものと推察される¹⁸⁾。博物館批評の様式は、展示の中心テーマや展示内容に注目し、何が強調され、また、何が見過ごされているのかという観点から、展示のありようについて批判的に検討することを基調としている。秩父宮記念スポーツ博物館をとりあげた第36巻第1号（2009年）を例に挙げると、日本スポーツの栄光の歴史を中心テーマに掲げ、そのためのアプローチとして、オリンピックやアスリートに関連した数多くの写真、スポーツ用具といった近代社会の遺物を展示しているが、オリンピックやアスリートが経験した負の側面、及び前近代社会から脈々と継承されている伝統スポーツ（武術・武道）に関連した展示が乏しく、日本スポーツ史の総合的な理解が難しいとする旨の批評がなされている¹⁹⁾。

博物館批評の様式に示されるような、展示を通じた歴史の語りに着目した批判的な検討は、今日のスポーツ博物館に関する史的研究の主流をなしている。その一方で、1990年代後半よりW.ヴァンプリュー、K.ムーア、M.フィリップス等の研究者によって、新たな研究の方向性が示されていった。彼らの主張の共通点は、長らく疎遠な関係にあった、スポーツ史を専門とする研究者とスポーツ博物館の運営に携わる実践者との間に有機的な連携を結び、歴史学に精通していない非専門的な普通の人びと（公衆）が歴史に触れ、考える場であるスポーツ博物館の中の歴史を協働して創造し、提示する歴史実践の必要性であった。彼らの主張は、パブリック・スポーツ・ヒストリー（public sport history）という用語をもって、学界とスポーツ博物館の協働関係に基づいてスポーツ史を探求せんとする機運を高めていくこと

となる。

歴史学を現実世界に応用するための多様な方法を模索する中で出現したアメリカのアプライド・ヒストリー（応用歴史学）、普通の人びとの日常生活に着目する「下からの歴史」を旗印として掲げていたイギリスのヒストリーワークショップ運動を基盤として成立していったパブリック・ヒストリー（public history）は、1970年代に英語圏の地域で萌芽し、日本では、2000年代初頭よりこの用語が使用され始めた。昔によれば、パブリック・ヒストリーは、歴史学の新しい研究分野や対象、方法を指し示すというよりも、現代社会の中で歴史学が向かうべき、ひとつの新しい方向性を指し示すものと考えた方が良くと論じたうえで、自らの編著書で取り扱うパブリック・ヒストリーの意味内容について、「人びとの日常的歴史実践を理解するだけでなく、その歴史実践過程に歴史学者が積極的に関わることを志向するラディカルな動きである」²⁰⁾とした。これに倣うならば、公衆がスポーツに関わる歴史実践を展開する場であるスポーツ博物館にたいして、学界はどれほどの理解を示し、どれほどの学識を伝達し、また、いかように関与してきたのかという疑問が浮上する。この疑問点に関わる議論を学界で提起したのがヴァンプリユー等であった。

パブリック・スポーツ・ヒストリーをいち早く主張したヴァンプリユーは、文献資料に基づいた実証史学を信奉する研究者がスポーツ博物館の存在を軽視してきたことに起因する、学界とスポーツ博物館の関係性の乏しさについて懸念を示し、学界にたいして思考の転換を促すための警鐘を鳴らしてきた²¹⁾。その要点は、ヴァンプリユーに同調していたムーアによって、「学界は研究活動において文献資料を重視し、スポーツ博物館が所蔵するモノ資料に価値を見出してこなかった」「学界は文献資料に基づいて編まれた学術的な歴史よりも、多様な展示形式を駆使してスポーツ博物館がかたちづくる歴史に低い価値をおいてきた」「学界はスポーツに関わる歴史的事実への批判性を欠いた祝祭の歴史を表現する場として、スポー

ツ博物館を捉えてきた」とまとめられている²²⁾。

これらは、それぞれ「歴史資料の序列化」「アカデミック・スポーツ・ヒストリー（academic sport history）とパブリック・スポーツ・ヒストリーの違い」「スポーツ博物館の認識をめぐる学界と公衆のズレ」として簡略化できるが、各点が密接に絡み合っていることも確かなところである。ヴァンプリユー等は、学界とスポーツ博物館の関係構築に向けて、以上に関わる個別的、横断的な留意事項を誌上で度々示してきた。彼らが繰り返してきた指摘内容を拾い上げ、集約したものを以下に列挙しておきたい。

- ・学界による歴史叙述の形式は、文字メディアに頼るばかりでなく、音声や映像等の非文字メディアにまで視野を広げる必要があり、五感を駆使した物質文化の研究に基礎を置きながらスポーツ博物館と協働し、展示を築き上げていくことを考えなければならない。
- ・学界で編まれる歴史は、専門的な知識を培った研究者の範囲内に限定されたものであり、年齢や学歴が異なる不特定多数の人びとに向けたスポーツ博物館がかたちづくる歴史は、多くの公衆の歴史認識に影響を及ぼす。学界で編まれる歴史が公衆によって参照されることは、皆無に等しい。
- ・展示を一方的な権力装置とみなして研究に着手する学界は、スポーツ博物館によってかたちづけられる歴史があまりにも単純で、学界で展開される議論の詳細を反映していないと批判するが、多種多様なメディアを活用し、効率的な情報伝達を意識しながら展示を創造していく博物館実践者の思考や工夫の側面に目を向けなければならない。
- ・殿堂博物館を引き合いに出し、スポーツ博物館がスポーツに関わる歴史的事実を伝えるのではなく、祝祭性を強調した聖地にすぎないと批判する研究者は、歴史の忠実な再現という規範認識に基づいてスポーツ博物館から目をそらすのが、スポーツ博物館が決して研究対象としてではなく、祝祭性の経験を期待する

公衆による歴史実践の場という側面を有することに自覚的であればならない。

実際のところ、ヴァンプリュー等が活動拠点とする英語圏の地域では、セミナーの開催や博物館展示の協働作業が所々で立ち上がり、学界とスポーツ博物館との関係構築が徐々に進みつつある。これと並行して学術研究も進展し、スポーツ博物館をめぐる多様な現象を把握するには限界があるものの、フィリップスが設置目的、建物の規模、スタッフ構成、運営資金の提供者等の特性からスポーツ博物館を公共博物館 (Academic)、法人博物館 (Corporate)、地域博物館 (Community)、店舗博物館 (Vernacular) に分類化し、研究上の有益な分析枠組を提供している²³⁾。また、スポーツ博物館の外側にある記念碑、彫刻、銘板、競技施設やそこで開催されたイベント、スポーツ博物館が所在する土地柄等、有形・無形の文化財への広範な視点に基づきながらスポーツ博物館という存在自体を捉え返そうとする取り組みも重ねられている²⁴⁾。

以上、スポーツ博物館に関する史的研究の動向をとりまとめたが、ここにあげた研究内容は、全て英語文献に掲載されたものであり、日本の研究動向は反映されていない。管見の限りではあるが、日本語文献を渉猟してみると、「スポーツ史研究」に掲載された「全国スポーツ博物館一覧」、及び「英国スポーツ博物館一覧」²⁵⁾ が歴史系の学会機関誌に認められるのみで²⁶⁾、他領域の学術誌に注目しても、博物館学に関連した視座から着手された論考が僅かに存在するだけである²⁷⁾。つまるところ、冒頭で述べたように、スポーツ博物館は学術的に探求されるべき「知」としての関心を集めつつあるが、学界とスポーツ博物館との協働関係を模索しつつある英語圏の地域と比較すると、日本の実情は寂しい限りである。

5. おわりに

日本語文献を通してスポーツ博物館に出会う機会が極めて少ない事実に示されるように、とりわけ、日本に所在するスポーツ博物館に着目した史

的研究は、これから開拓される領野といっても過言ではない。この現状において、いかなる取り組みが領野の拡大に連なる基礎的な作業となるのであろうか。浅見を承知の上で、想起される取り組みを数例ではあるが以下にとりあげ、結びとしたい。

①スポーツ博物館の現状把握を目的とした基礎的研究

「スポーツ史研究」に掲載された「全国スポーツ博物館一覧」は、おおよそ20年前にまとめられたものである。そこから今日までの間、スポーツ界や博物館界をとりまく社会情勢の変化に伴い、数的増減やジャンルの拡大・縮小が今日のスポーツ博物館に生じていることは確かなところであろう。スポーツ博物館に包含する博物館の境界線をどこに設けるかという困難な作業に直面せざるをえないが、スポーツ博物館の範囲に関わる議論を踏まえた「全国スポーツ博物館一覧」の更新作業は、今後の史的研究に向けた基礎資料の提供という観点から、必要不可欠な取り組みとして位置づけられよう。

②各スポーツ博物館の設立過程に関わる事例研究

先述したように、英語圏の地域では展示を通した歴史の語りに着目した批判的な検討が重ねられてきたが、各スポーツ博物館の設立過程に照準した取り組みは、実際のところ乏しい状況にある。展示の内容が博物館の設立過程と決して無関係ではなく、設立過程に存在した初期の博物館実践者の志向性が展示の方向性の指針をなすと考えるならば、スポーツ博物館がたどった設立過程を看過することはできない。各スポーツ博物館の設立過程に関わる事例研究を積み重ね、それらと展示に関する批判的な検討とが相補関係を結んでいった先に、展示の側面から見たスポーツ博物館の日本の特色が導き出されよう。

③スポーツ博物館史における転換期の解釈に関する研究

先にまとめたスポーツ博物館略史の中で述べたように、「全国スポーツ博物館一覧」を参照してみると、スポーツ博物館が国内で広がりを見せていった1950年代、また、スポーツが博物館の一ジャンルとしての地位を確立していった1980年代は、それぞれ日本のスポーツ博物館史における画期として位置づけられる。いかなる時代的・社会的要請のもとにこれらの画期が到来したのか、その解釈を深めていく作業は、研究遂行上の参照座標となるスポーツ博物館通史の洗練化を図るにあたって重要な取り組みとして考えられる。また、この作業は、スポーツ博物館にたいする人びとの経験の変容を明らかにする上で有効な試みとなる。

注および引用・参考文献

- 1) 参考までに、博物館学の専門事典にある「ミュージアム」の項目には、「我が国には博物館法のもとにおいて博物館に関する制度が設けられているのだが、この制度の枠組みを超えて活動しようとする施設や観光地などに設置された施設が博物館という名称を使わずに『〇〇ミュージアム』と称する傾向がある」(鷹野光行:「ミュージアム」、全日本博物館学会編『博物館学事典』雄山閣、2011年、p.353)との記載がある。ここから、博物館学では、学問上における「museum」の用語の使用について、「博物館」と明確な違いを設けている訳ではないことがうかがえる。
- 2) 稲垣正浩: スポーツ情報学に関する基礎的研究-その4. スポーツ博物館情報からのアプローチ「日本体育大学体育研究所雑誌」第27巻第1号、pp.2-4、2001年。
- 3) Victor J. Danilov, *Sports Museums and Halls of Fame Worldwide*, (Jefferson, North Carolina, and London. : McFarland & Co.,2005), pp.5-11.
- 4) Neslihan Arikan and Özbay Güven, "Structure, Functioning and Problems of Nice National Sport museum of France," *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(10), p.126, 2017.
- 5) 中房敏朗・松井良明・石井浩一: 全国スポーツ博物館一覧「スポーツ史研究」第13号、pp.55-73、2000年。
- 6) 戦前期の日本で開催された博覧会や展覧会は、そこでの品々を保存、展示する博物館の整備を促す役割を果たしたが、井上は1917年から1940年の間に開催されたスポーツ展覧会の内容をまとめている(井上裕太: 戦前期におけるスポーツ展覧会の分類と特徴「博物館学雑誌」第40巻第2号、pp.69-88、2015年、同: 1922年の運動体育展覧会における女子野

- 球試合計画の意義－展覧会の付帯事業としての女子野球－、スポーツ史学会第32回大会、2018年)。
- 7) 2019年10月から同年12月にかけて電話、インターネットを用いて実施された「全国スポーツ博物館一覧」にある全233館の現状調査によると、開館年が判明した161館の年代別内訳は、2館(1940年代まで)、7館(50年代)、6館(60年代)、19館(70年代)、50館(80年代)、77館(90年代)であったことから(Yoshinori Watanuki, Gen Fukui, Tokuma Matsunami, The current situation of sports museums in Japan -On the basis of "A List of Sports Museums in Japan" (2000)-, ISHPES2020 Online Congress発表資料)、スポーツ博物館の顕著な増加が80年代に認められると言えよう。
- 8) Josh Howard, "On sport, Public History and Public Sport History," *Journal of Sport History*, 45(1), pp.28-31, 2018.
- 9) 1960年代以降、アメリカや西ヨーロッパでは、人間や動植物に関わる自然史資料の収集・保存・展示を主とした博物館の機能が変容していき、政治や文化と結びついた資料をもって当該社会を表象する取り組みが展開される中で、スポーツと博物館が接合していった。しかしながら、上中流階級に支えられたイギリスの博物館界では、教養的要素に欠けたスポーツを博物館にとりこむ価値や妥当性を見出せないとする向きが強く、そのために、近代スポーツ発祥の地でありながらも、イギリスはサッカー博物館の設立においてアメリカに遅れをとった(Kevin Moore, "Sport History, Public History, and Popular Culture : A Growing Engagement," *Journal of Sport History*, 40(1), pp.44-55, 2013)。
- 10) J. Reilly, "The Development of Sport in Museum," *The International Journal of the History of Sport*, 32(15), p.1779, 2015.
- 11) Trevor Ruddell, "Sports Museums and Heritage Collections," in John Nauright ed., *Sports around the World, Vol.1 : General Topics, Africa, Asia, Middle East, and Oceania* (California : ABC-CLIO, LLC, 2012), p.66.
- 12) スポーツ博物館の所蔵資料や運営活動等に関わる情報ネットワークの構築を目的として、アメリカでは、1971年にスポーツ殿堂博物館協会(Association of Sports Museums and Halls of Fame、現在のInternational Sports Heritage Association)が設立された。今日、全世界で130以上のスポーツ博物館が同協会に加盟している。また日本では、2017年度よりスポーツ庁が2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会、日本で開催された国際競技大会等のアーカイブの構築とその利活用に向けた「スポーツ・デジタルアーカイブ構想調査研究事業」を実施している。
- 13) Reilly, *op.cit.*, pp.1779-1780, ; Moore, *op.cit.*, p.45.
- 14) Howard, *op.cit.*, p.32.
- 15) E. スナイダーの論考を手掛かりとして(Eldon E. Snyder, "Sociology of Nostalgia : Sports Halls of Fame and Museums in America," *Sociology of Sport Journal*, 8(3), pp.228-238, 1991)、スポーツツーリズム研究の分野では、「ノスタルジア」の概念枠組をもとにした展示品や展示形式の分析、来館者へのインタビュー調査から、スポーツ博物館を多角的に検証する取り組みが重ねられてきた。
- 16) これらに該当する数多くの論考は、記憶論における重要概念の一つであるP.ノラの「記憶の場」(ピエール・ノラ編、谷川稔監訳:『記憶の場－フランス国民意識の文化＝社会史』第1巻～第3巻、岩波書店、2002年・2003年)、T.ベネットやS.マクドナルドが提唱した「展示の政治学」(Tony

- Bennett, "The Exhibitionary Complex" *New Formations*, 4, pp.73-102, Spring 1988. ; Sharon MacDonald ed., *The Politics of Display : Museum, Science, Culture*, (New York : Routledge, 1998)) を基底に据えたものとして捉えられる。
- 17) Doug Gelbert, *Sports Halls of Fame A Dictionary of over 100 Sports Museums in the United States* (Jefferson, North Carolina, and London. : McFarland & Co.,1992), ; Danilov, *Hall of Fame Museums : A Reference Guide*, (Westport, Connecticut. : Greenwood Press, 1997).
- 18) スポーツ史学会の会報「ひすぽ」では、1998年の第40号より「スポーツ博物館めぐり」が原稿区分の一つに設けられている。
- 19) Gerald R. Gems and Gertrud Pfister, "Prince Chichibu Memorial Sports Museum," *Journal of Sport History* 36(1), pp.155-157, 2009.
- 20) 菅豊：「パブリック・ヒストリーとはなにか?」、菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』勉誠出版、2019年、p.8。
- 21) Wray Vamplew, "Facts and Artifacts : Sports Historians and Sports Museums," *Journal of Sport History* 25(2), pp.268-282, 1998. ; Idem, "Taking a Gamble or a Racing Certainty : Sports Museums and Public Sports history," *Journal of Sport History* 31(2), pp.177-191, 2004.
- 22) Moore, "Foreword," in Murray G. Phillips ed., *Representing the Sporting Past in Museums and Halls of Fame*, (New York : Routledge, 2012), p.xii.
- 23) Phillips ed., *op.cit.*,pp.5-18.
- 24) これに該当する論考は、以下の編著書に数多く収められている。
- ・ Phillips ed., *op.cit.*
 - ・ Jeffrey Hill, Kevin Moore, and Jason Wood, eds., *Sport, History, and Heritage : Studies in Public Representation* (Woodbridge : Boydell press, 2012).
- 25) 松井良明：英国スポーツ博物館一覧「スポーツ史研究」第16号、pp.73-77、2003年、同著：英国スポーツ博物館一覧 (2)「スポーツ史研究」第17号、pp.59-76、2004年。
- 26) スポーツ史の領域に関わる取り組みとして、以下の学会発表と博物館紹介、及び実態調査アンケートが行われている。
- ・ 山本英作：サッカーミュージアムにおけるブラジル・サッカー史像－サンパウロ市バカエンブー競技場内Museu do Futebol－、日本体育学会第64回大会、2013年。
 - ・ 大修館書店編集部編：『最新スポーツルール百科』大修館書店（学校体育の学習教材である本書は、2014年に『観るまえに読む大修館スポーツルール』へと改題されたが、2006年以来、「スポーツミュージアムへの招待」と題して、日本に所在する博物館を紹介している）。
 - ・ スポーツ文化調査研究協力者会議編：全国スポーツ関係博物館実態調査アンケート「スポーツ文化」創刊号、pp.52-61、2003年。
- 27) 矢島ますみ：スポーツ博物館の特徴とその使命「明海大学教養論文集」第15号、pp.10-18、2003年、高市純行：博物館でタイガース－新規ミュージアム顧客開拓への挑戦「日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要」第10号、pp.1-9、2006年、井上裕太：スポーツ振興による地域振興と博物館の役割－秋田県能代市のバスケットボールを活用したまちづくりを事例に－「国学院大学博物館学紀要」第42輯、pp.25-44、2017年。

(2020年6月24日受付)
(2020年12月18日受理)